

## 主の回復における唯一の働き

(金曜日——午後の部)

メッセージ 6

### 安息日の原則を守ることは建造の働きと関係がある

聖書：出 31:12-17. マタイ 11:28-30

#### I. 神の住まいの建造に関する長い記載の後、出エジプト第 31 章 12 節から 17 節に、安息日を守る戒めの繰り返しがあります：

- A. 安息日に関する挿入が幕屋の建造する働きの命令に続くという事実が示すのは、主が建造する者、働く者たちに、主のために働くとき、どのように主と共に安息するかを学ぶように告げていたということです。
- B. もしわたしたちが、どのように主のために働くかを知るだけで、どのように彼と共に安息するかを知らないなら、神聖な原則に反して行動しています：
  - 1. 神が第七日に安息したのは、彼の働きを完成して満足したからです。神の栄光が現されたのは、人が彼のかたちを持ち、彼の権威が行使されて、彼の敵サタンを征服しようとしていたからです。人が神を表現し、神の敵を対処する限り、神は満足し、安息することができます——創 1:26, 31—2:2。
  - 2. 後ほど、第七日は安息日として記念されました（出 20:8-11）。神の第七日は人の第一日でした。
  - 3. 神はあらゆるものを用意して人に享受させました。人は創造された後、神の働きに加わったのではなく、神の安息の中へと入りました。
  - 4. 人が創造されたのはまず働くためではなく、神をもって満足し、神と共に安息するためでした（参照、マタイ 11:28-30）。安息日は人のためにあるのであって、人が安息日のためにあるではありません（マルコ 2:27）。
- C. 出エジプト第 31 章 17 節は言います、「六日の間にエホバが天と地を造り、七日目に安息し憩われた」：
  - 1. 安息日は神の安息であっただけでなく、彼の憩いでした。
  - 2. 神は彼の創造の働きが完成した後、安息しました。彼は御手のわざを見つめ、天、地、すべての生き物、特に人を見て、「非常に良い！」と言いました（創 1:31）。
  - 3. 神は人のゆえに憩いました。神がご自身のかたちに霊のある人を創造したのは、人が彼と交わりを持つことができるためでした。ですから、人は神の憩いでした——26 節, 2:7. 参照、ヨハネ 4:31-34。
  - 4. 神は人類を創造する前、「独身」でした（参照、創 2:18, 22）。神は人が彼を受け入れ、彼を愛し、彼で満たされ、彼を表現して彼の妻となることを願いました（Ⅱコリント 11:2. エペソ 5:25）。神は未来の永遠において、妻、すなわち新エルサレムを持ち、それは小羊の妻と呼ばれます（啓 21:9-10）。
  - 5. 人は神を憩わせる飲み物のようであって、神の渇きをいやし、彼を満足させます。神は彼の働きを終えて、安息し始めたとき、人を彼の同伴者として持ちました。

6. 神にとって、第七日は安息と憩いの日でした。しかしながら、神の同伴者である人にとって、安息と憩いの日は第一日でした。人の第一日は享受の日でした。
- D. わたしたちが享受を得る前に、神がわたしたちに働くことを求めないのは、神聖な原則です。わたしたちは彼と共に、また彼に対して満ち満ちた享受を持った後、彼と共に働くことができます：
1. もしわたしたちが、どのように神と共に享受を持つか、どのように神ご自身を享受するか、どのように神で満たされるかを知らないなら、どのように彼と共に働き、彼の神聖な働きの中で彼と一になるかを知りません。人は、神が彼の働きの中で成就したものを享受します。
  2. ペンテコステの日に、弟子たちがその霊で満たされたことは、彼らが主に対する享受で満たされたことを意味します。彼らがその霊で満たされたので、他の人は、彼らがぶどう酒に酔っていると思いました——使徒 2:4 前半, 12-13。
  3. 実は、彼らは天のぶどう酒に対する享受で満たされていたのです。彼らはこの享受で満たされた後はじめて、神との一の中で神と共に働き始めました。ペンテコステは第八週の第一日でした。ですから、わたしたちはペンテコステの日に関して第一日の原則を見ます。
  4. それは神にとって、働いて安息する事柄です。人にとっては、安息して働く事柄です。
- E. わたしたちは召会を建造するという神の神聖な働き（幕屋を建造する働きで予表される）を行なうとき、しるしを帯びて、わたしたちが神の民であり、神を必要としていることを示さなければなりません。その時わたしたちは、神のために働くだけでなく、神と一になって神と共に働くことができます。神はわたしたちの働く力、また労苦する能力です：
1. わたしたちは神の民であり、しるしを帯びているべきです。すなわち、神がわたしたちの享受、力、能力、すべてとなって、わたしたちが神のために働き、彼を尊び、彼の栄光を現すことができるようになる必要があります。
  2. 安息日が意味するのは、わたしたちが神のために働く前に、神を享受し、彼で満たされる必要があるということです。ペテロは内を満たす神、すなわち内を満たす霊によって福音を宣べ伝えました。ですから、ペテロは神の同労者であるというしるしを帯びており、彼の福音の宣べ伝えは神にとって誉れと栄光でした——14 節。
  3. 神の民として、わたしたちが帯びなければならないしるしとは、わたしたちが神と共に安息し、神を享受し、まず神で満たされ、そしてわたしたちを満たす方と共に働くということです。さらに、わたしたちは神と共に働くだけでなく、神と一である者として働きます。
  4. わたしたちは神の民に語る時、わたしたちの主がわたしたちの力、能力、すべてであって、言葉を供給するためであるというしるしを帯びることを、常に求めなければなりません——II コリント 13:3, 使徒 6:4。
- F. 安息日を守ることはまた永遠の合意、あるいは永遠の契約であり、わたしたちが

まず神を享受し神で満たされることによって神と一になり、そして神のために、神と共に、神との一の中で働くことを、神に向かって保証します——出 31:16 :

1. わたしたちが自分自身によって主のために働き、しかも彼を飲み、食べることによって、彼を受け入れ彼を享受することがないのは、厳粛な事柄です——参照、I コリント 12:13. ヨハネ 6:57。

2. ペテロはペンテコステの日に語っていたとき、内側でイエスにあずかり、彼を飲み、食べていました。

G. 安息日はまた聖別の事柄でもあります (出 31:13)。わたしたちは主を享受し、そして彼と共に、彼のために、彼と一になることによって働くとき、自然に聖別され、俗なすべての事物から神へと分離され、神で浸透されて、肉的で天然であるすべての事物を置き換えます。

H. 召会生活の中で、わたしたちは多くの事を行ない、しかもまず主を享受することがなく、主と一になって主に仕えることがないかもしれません。そのような奉仕の結果は霊的な死と、からだの交わりを失うことです (14-15 節)。

I. 神の住まいに関するあらゆる事は、わたしたちを一つの事柄に導きます。それは主の安息日、そしてその安息と憩いです。召会生活の中で、わたしたちは幕屋におり、幕屋はわたしたちを安息に、神の定められた御旨と彼がなしたことの享受に導きます！

J. 幕屋とそのすべての器具を建造する働きは、神に対する享受をもって開始し、その期間に神を享受することによる憩いをもって継続すべきです。これが示すのは、わたしたちが神のために働くのは自分自身の力によってではなく、彼を享受することによって、また彼と一になることによってであるということです。これが安息日の原則を守り、わたしたちの霊の中の内なる安息としてのキリストを持つことです。

II. 「すべて労苦し重荷を負っている者は、わたしに来なさい。そうすれば、わたしはあなたがたに安息を与える。わたしは心の柔和なへりくだった者であるから、わたしのくびきを負い、わたしから学びなさい。そうすれば、あなたがたは魂に安息を見いだす。なぜなら、わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」——マタイ 11:28-30 :

A. この労苦しは、律法の戒めや宗教の規則を守る努力の労苦しを指すだけでなく、あらゆる働きにおいて成功しようとする奮闘の労苦しも指しています。このように労苦しする者はだれでも、常に大きな重荷を負っています。

B. 主は御父をほめたたえ、御父の道を承認し、神聖なエコノミーを宣言した後 (25-27 節)、このような人が彼に来て安息を得るようにと召しました。

C. 安息は、律法や宗教の下の、あるいはあらゆる働きや責任の下の労苦しと負担から解放されることを指すだけでなく、完全な平安と満ち満ちた満足をも指しています。

D. 主のくびきを負うとは、御父のみこころを受け入れることです。それは、律法や宗教のあらゆる義務によって規制され支配されたり、何かの働きの奴隷にされた

りすることではなく、御父のみこころによって拘束されることです。

- E. 主はそのような生活をして、他のものではなく、ただ御父のみこころだけを顧みました（ヨハネ 4:34, 5:30, 6:38）。主はご自身を御父のみこころに完全に服従させました（マタイ 26:39, 42）。ですから、主はわたしたちに、主から学ぶように求めています。
- F. 柔和、あるいは溫柔であるとは、反対に抵抗しないことを意味し、へりくだるとは、自分を重く見ないことを意味します。すべての反対の中で、主は柔和であり、すべての拒絶の中で、彼は心がへりくだっていました。
- G. 彼はご自身を御父のみこころに完全に服従させ、ご自身のために何を行なうことも願わず、ご自身のために何かを得ることを期待しませんでした。ですから、環境がどうであっても、彼は心の中に安息を持っていました。彼は御父のみこころで完全に満足していました。
- H. わたしたちが主のくびきを負い、彼から学ぶことによって見いだす安息は、わたしたちの魂のためです。それは内側の安息です。それは単にどんな外側の性質のものでもありません。
- I. 主のくびきは御父のみこころであり、彼の荷は御父のみこころを実行する働きです。そのようなくびきは負いやすく、苦しくはありません。またそのような荷は軽く、重くはありません。
- J. 「負いやすい」というギリシャ語の言葉は、「用いられるのにふさわしい」を意味します。ですから、良い、親切で、柔和で、温和で、容易で、喜ばしいものであって、困難で、過酷で、陰しく、苦痛であるのと相對します。
- K. 神のエコノミーのくびきはこのようなです。神のエコノミーにおけるあらゆる事は重荷ではなく、享受です。

**務めからの抜粋：**

## 安息日の意義

ある人たちは、安息日の意義は単に働きをやめることであると思うかもしれませんが、これは聖書における安息日の真の意義ではありません。聖書は、神が第七日に安息された事実を強調します。創世記第2章2節は言います、「第七日に、神は行なっていた彼の働きを終えられた。そして第七日に、神は行なっていたすべての働きから安息された」。

創世記によれば、神にとって安息日は第七日ですが、人にとってそれは第一日です。六日のうちに神は天、地、人が存在して神の定められた御旨を完成するのに必要なあらゆるものを創造しました。万物が造られた後、人が第六日に創造されました。これは、人が神の創造する御手から出て来るとすぐ、彼の第一日、すなわち神の第七日が始まろうとしたことを意味します。こうして、神にとって第七日であったものは、人にとって第一日であったのです。この意義は、神にとって安息日は働きの後の安息であり、人にとってまず安息があって、それから働きがあるということです。神

はまず六日間働き、そして第七日に安息されました。しかし人は彼の第一日に安息し、それから働き始めました。

### 神の憩い

わたしは、出エジプト記第31章17節が、「エホバが……七日目に安息し憩われた」と告げていることで幸いです。これは、安息日が神にとって安息であっただけでなく、彼にとって憩いでもあったことを示します。創世記も出エジプト記も、神は七日目に安息されたと告げています。しかし第31章17節で、「憩われた」という言葉が加えられています。これは、神でさえ憩う必要があることを啓示します。

安息するのは一つの事ですが、憩うのはそれ以上のことです。わたしたちが安息するためには特に何も必要としません。座るか横になるかで十分です。しかし憩うために、わたしたちは食べたり飲んだりするものを必要とします。わたしたちはしばしば、憩うものとして食物や飲み物を指します。ここでの点は、わたしたちが憩おうとするなら、わたしたちにとって憩うものを必要とするということです。神についても同じです。神はご自身を憩わせるものを必要とされます。あなたは神の憩いとは何であるか、知っているのでしょうか？ 神を憩わせるものは何でしょうか？

おそらくあなたは、神が憩う必要があるという事実に印象づけられることなしに、出エジプト記第31章を何度も読んできたでしょう。わたしは一度ならず出エジプト記を解説してきましたが、ごく最近になって第31章17節の「憩われた」という言葉の意義を見たこと証しすることができます。聖書は、神の創造の働きが完成した後、彼が安息し憩われたことを啓示しています。神は何の上に安息されたのでしょうか？ 神は彼の創造の上に安息されました。例証として、仮にある職人が長い時間をかけて非常に特殊なイスを造るとします。彼の働きが終わると、彼は自分が造ったイスの上で安息し、それを享受し、それについて思うでしょう。わたしは自分の執筆の働きを終えた後、しばしばこのような安息を経験します。わたしは何かを書き終えたとき、いすにもたれて、自分が書いたものを見つめ、それを享受します。わたしは特に、主の御言を通して主から受けた光を享受します。同じように、自分の衣服を作る姉妹たちは、ある特別な衣服を作り終えると、十分な安息を享受します。同じ原則で、神は人を創造した後、安息されたのです。神は彼の御手のわざ、すなわち天、地、すべての生き物、特に人を見つめ、「非常に良い！」と行うことができました。そして神は安息し、また憩うことができました。

神は何をもって憩われたのでしょうか？ 神は人をもって憩われたのです。人は神の憩いでした。神は人を愛されました。神はご自身のかたちに、霊を伴って人を創造しました。それは、人が彼と交わりを持つことができたためでした。ですから、人は神の憩いでした。

創世記第2章18節によれば、神は言われました、「その人が独りでいるのは良くない。わたしは彼に、彼の配偶者としての助け手を造ろう」。この言葉には予表における意義があり、それは神が独りでいるのは良くないことを示します。神は人を創造す



る前、独身にたとえることができました。ある人は、わたしたちが独身という言葉を用いて、わたしたちの聖なる神について語るのを批判するかもしれませんが。しかしわたしは、神はこの言葉がご自身に関して用いられるのを聞いて幸いであると信じます。おそらく神は言われるでしょう、「わたしの子よ、この言葉はわたしの心に触れる。わたしは人類を創造する前は本当に独身であった」。聖書は、過去の永遠に神が「独身」であったことを啓示します。しかし未来の永遠に、彼は妻、すなわち新エルサレムを持たれ、それは小羊の妻と呼ばれます(啓 21:9-10)。ですから、新エルサレムが小羊の妻であるという聖書の啓示にしたがって、わたしは神について独身という言葉を大胆に用いるのです。

神は彼によって創造された人を見たとき、安息し憩うことができました。人は憩わせる飲み物のようであって、神の渴きをいやし、彼を満足させました。神は彼の働きを終えて、安息し始めたとき、人を彼の同伴者としました。神にとって、第七日は安息と憩いの日でした。しかしながら、神の同伴者である人にとって、安息と憩いの日 は第一日でした。人の第一日は享受の日でした。

### 神聖な原則

わたしたちが享受を得る前に、神がわたしたちに働くことを求めないのは、神聖な原則です。神はまずわたしたちを、享受をもって供給されます。わたしたちは彼と共に、また彼に対して満ち満ちた享受を持った後、彼と共に働くことができます。もしわたしたちが、どのように神と共に享受を持つか、どのように神ご自身を享受するかを知らないなら、どのように彼と共に働くかを知りません。わたしたちは神の神聖な働きの中で、どのように神と一であるかを知りません。

わたしたちは神と共に働くことと、自分自身の力によって神のために働かないことを強調します。そうです、わたしたちは神と共に、また神によってさえ働くべきです。しかし聖書が啓示することによれば、単に神と共に働くことでさえ十分ではありません。わたしたちは神の働きにおいて神と一である必要があります。これは、わたしたちが神を享受することを必要とします。もしわたしたちがどのように神を享受し、神で満たされるかを知らないなら、どのように神と共に働くか、どのように彼の働きの中で神と一であるかを知りません。

この原則のととても良い例証が新約に見いだされます。使徒たちの新約の務めは、彼らがペンテコステの日に持った享受と共に始まりました。弟子たちは、六日間働いてからペンテコステの日に主を享受することをしませんでした。実際の状態は、その霊が彼らの上によって来て彼らを満たすまで、主は彼らに待つように告げました。弟子たちはその霊で満たされたとき、何をもって満たされたのでしょうか？ 疑いもなく、彼らは主の享受で満たされました。彼らはその霊で満たされたので、他の人たちは、彼らはぶどう酒で酔っていると思いました。実は、彼らは天のぶどう酒の享受で満たされていました。この享受で満たされた後はじめて、彼らは神と共に働き始めました。これが神と共に働く道、神との一の中で働く道です。ペテロが使徒たちと共に

立ち上がって福音を宣べ伝え、それによって神のために働いたとき、彼らはみな神の働きの中で神と一でした。

ペンテコステの日は週の第一日でした。ペンテコステは七週、あるいは四十九日という期間の後の五十日目を意味します。わたしたちはレビ記第23章から、ペンテコステの日は初穂の祭りの後の五十日であったことを知ります。これは、ペンテコステが第八週の第一日であったことを意味します。ですから、わたしたちはペンテコステの日に関して第一日の原則を見ます。

人にとって、安息の日は常に第一日でした。旧約によれば、安息日、人の安息の日は彼の第一日でした。同じように、新約によれば、第八日、すなわち人のための安息の日はやはり第一日でした。

旧約の原則によれば、人の安息の日は、神の働きが完成した後に来る日です。人は、自分の働きが終わった後に安息するわけではありません。人は神の働きの完成の後に安息し、それを享受します。神は働かれ、人は享受します。人は、神が彼の働きにおいて成就されたものを享受します。

人は創造されると直ちに、呼吸する空気と飲む水を必要としました。神はすでに第二日に大空、大気を創造されました。なぜなら神は、空気なしに人は生きることができないことを知っておられたからです。神はまた人のために水と食物とを備えました。これが、第七日は神のための安息の日であった理由です。すなわち、神は六日間働き、あらゆることを準備して、人が享受するようにされました。人が神の創造する御手から出て来たとき、彼の第一日は神の第七日でした。ですから、彼は神と共に享受を持ち、神と共に生き、神と共に歩み、最後に神と共に働く用意ができました。神は彼をエデンの園へと置き、それを耕させ守らせました(創2:15)。おそらく第一日に神と共に安息を享受した後、アダムはさらに六日間働いて、園を顧みただしょう。そして彼の第八日であった日、もう一つの第一日に、彼は再び神と共に安息しました。これは循環であって、安息することと働くことの間隔が何度も継続するのです。神にとっては、働くことと安息するという事柄です。人にとっては、安息することと働くことの事柄です。

神は幕屋と器具に関する啓示を与えた後、また神が建造する者たちを選び、彼らについてモーセに命令を与えた後、続けて安息日について再び語られました。神はこう言っておられたかのようです、「わたしの安息日を忘れてはならない。あなたは自分の仕事で労苦しているのではなく、神聖な働きを行なっているということを言い訳にしてはならない。あなたは、働いてわたしの住まいを建造しているので、毎日絶えず働くことができるとってはならない。違う、わたしの神聖な働き、幕屋を建造する働きを行なうことでさえ、しるしを帯びて、あなたがわたしの民であり、わたしを必要としていることを示さなければならない。それゆえ、あなたはまずわたしを享受する必要がある。そうすれば、あなたはわたしのためだけでなく、わたしと共に、わたしと一であることによって働くことができる。わたしはあなたの働く力、また労苦する能力となる。しかし、もしあなたが自分自身の中で、自分自身によって働くなら、

それはわたしに対する冒とくとなる。あなたはわたしの住まいを建造する働きを、わたしと共に、わたしによって、わたしとの一の中で行なわなければならない。あなたがこのように働くなら、わたしはとても幸いである。しかし、もしあなたが自分自身によってわたしのために良い働きを行なおうとし、わたしを差し置くなれば、それはわたしに対する冒とくとなる。なぜなら、それは悪魔の民のしるしだからである。あなたはわたしの民であり、しるしを帯びているべきであって、わたしがあなたの享受、力、能力となる必要がある。あなたはわたしがあなたのすべてであることを必要とする。それは、あなたがわたしのために働くことができるようになるためである。このように働くことによって、あなたはわたしを尊び、わたしの栄光を現す。これは、あなたがわたしの民であることを示すしるしを帯びることである」。

### わたしたちが神と一であるというしるし

わたしたちはみな安息日に関する基本的な学課を学ぶ必要があります。わたしは若かったとき、安息日として守るべき日はどの日か、八日目か七日目かについて他の人々と議論しました。今わたしは言いますが、そのような論議は完全に無駄です。安息日が意味するのは、わたしたちが神のために働く前に、神を享受し、神で満たされる必要があるということです。わたしたちが神を享受したなら、そして神で満たされているなら、神のために働く用意ができています。そのような働きは、自分自身によるものではありません。それは神によります。ペンテコステの日のペテロの状況を考えてください。ペテロは立ち上がって福音を宣べ伝えたとき、自分自身によって宣べ伝えませんでした。彼は自分を満たしたその神によって宣べ伝えました。福音を宣べ伝えるとき、ペテロは空ではありませんでした。彼は内を満たす神によって、内を満たす霊によって福音を宣べ伝えました。ですから、ペテロは神の同労者であるしるしを持っており、彼の福音の宣べ伝えは神にとって誉れと栄光でした。

この世の人々はみな自分自身によって働きます。彼らは、神に属していることを示すしるしを身に帯びていません。彼らは神を享受せず、神と共に安息せず、神と共に働きません。わたしたちの状況は完全に異なっています。なぜなら、わたしたちにはしるしがあるからです。わたしたちが帯びるしるしとは何でしょうか？ そのしるしとは、わたしたちが神と共に安息し、神を享受し、まず神で満たされ、そしてわたしたちを満たす方と共に働くということです。さらに、わたしたちは神と共に働くだけでなく、神と一である者として働きます。

わたしが毎回、立ち上がって御言を供給するとき、わたしの唯一の祈りは、わたしの語りかけの中で主と一であるようにということであると、わたしは証しすることができます。わたしは繰り返し祈ります、「主よ、わたしは語る中で、あなたと一つ霊であることを実行したいのです。それは、わたしの語るあなたがあなたの語るようになるためです。主よ、あなたがわたしの語る中で語るのではありません。もしあなたがわたしと一でないなら、わたしは何も語りません。わたしは決して自分の空虚な自己の中で語りません。それはあなたに対する侮辱であり、あなたに対する冒とく



です。主よ、わたしはあなたと共に語るだけでなく、あなたと一であることによって語ります。聞く人たちは、わたしが語っているとき、あなたがわたしと一であるという印象を持たなければなりません。主よ、わたしの語ることは、わたしがあなたと一つ霊であるというわたしの側からの実行を含むだけでなく、あなたがわたしと一つ霊であるというあなたの側の実行も含まれます」。わたしたちがこのように語るなら、それは主にとって何という誉れと栄光でしょう！これが安息日のしるしです。わたしは語る中で、わたしの主がわたしの安息日であるというしるしを帯びることを常に求めます。彼はわたしの安息、わたしの憩い、わたしの活力、わたしの力、御言を供給するためのわたしのすべてです。

出エジプト記第31章12節から17節で、幕屋を建造する者たちは、主と共に安息し憩うまで働きを始めないように命じられたことを見ます。そして彼らは神のために、また神と共に働くことができました。しかしながら、この働きは継続して進むものではありませんでした。むしろ、それは労働の六日と安息の一日という合間を置いての働きです。合間ごとに、始まりは安息の日であり、働きの六日が続きました。そしてもう一つの合間が安息をもって始まり、働きをもって継続します。

わたしたちが強調してきたのは、神にとって安息日は第七日であり、人にとっては第一日であること、神は人の享受と安息のために働かれたこと、人は神が彼の働きで完成されたものを享受して、神と共に働くことです。人は第一日に、神が前の六日間に完成されたものを享受しました。それから続く六日間、人は神と共に働きました。六日の働きの後、人は再び神が完成されたものをまず享受し、そして再び、続く六日間働きました。これは循環として進みます。この循環は、わたしたちが神と一であることのしるしです。

## 永遠の契約

安息日を守ることはまた合意、あるいは契約です。わたしたちが安息日を守り始めるとき、これが示すのは、わたしたちが合意、契約に署名したこと、わたしたちがこのように神と一であることを神に向かって保証することです。わたしたちが神と一になろうとするのは、まず神を享受することにより、そして神のために、神と共に、神との一の中で働くことによってです。これは永遠の契約です。それは単に一つの時代、<sup>けいりん</sup>経綸、世代のためではありません。それはわたしたちと神との間の永遠の合意です。

契約は合意より強力であり、合意は約束より強力であり、約束は通常という言葉より強力です。神は今後わたしたちが行って神のために、神と共に、神との一の中で働く前に、神を享受し、神で満たされることを彼に確証する彼との契約に署名してもらいたいのです。いったんわたしたちが神とのそのような契約に署名して、それを守ろうとする確証を神に与えると、その契約を破ってはなりません。もし神との合意を破るなら、彼はわたしたちを天の法廷に連れて行き、契約守らないことでわたしたちを責めるでしょう。幕屋の建造の働きに関する安息日はしるしと永遠の契約、すなわち変え

ることができない契約であることを見るのは重要です。

わたしたちが自分自身によって主のために働き、しかも彼に祈り、彼に信頼することがないのは、厳粛な事柄です。実は、わたしたちが必要とするのはおもに主に信頼することではなく、彼を取り入れ、彼を食べることによって彼を享受することです。ペンテコステの日に、ペテロは主に信頼していただけではありませんでした。彼は主で満たされ、主に酔ってさえいました。ペテロが語っていたとき、主に酔っており主を食べていたと、あなたは信じないでしょうか？ これは、ペテロがイエスを宣べ伝えていたとき、内側でイエスにあずかっていたことを意味します。事実、彼は食べていたものを宣べ伝えました。彼は享受していたものを証しました。ペテロは主との合意に署名していました。彼は主と契約を結んでいました。両当事者、主とペテロは合意の自分の分を守らなければなりません。もしペテロが主を食べているのに、主が彼を離れたなら、主はその契約を破ったこととなります。しかしペテロが必要とするすべてのものを主が供給しておられたのに、ペテロが主からそらされたなら、ペテロはその契約を破ったのです。ここで極めて重要な点は、安息日がしるし、また契約、条約、合意でもあるということです。

### **聖別の事柄**

安息日はまた聖別の事柄でもあります。安息日はわたしたちを聖別し、わたしたちを任命し、わたしたちをしるし付けます。わたしたちが主を享受し、そして主と共に、主のために、主と一であることによって働くとき、自然にわたしたちは聖別されます。わたしたちは聖くなり、俗なものから分離されます。(出エジプト記ライプスタディ、メッセージ 172)